



せかいじゅうの種 8



「んんんツ!!」

用を足しに、一人になった所を  
毒樹に捕まっちゃった。

んんんツ!!

やはり、単独行動などするべきではなかったと後悔しつつ、  
大声を出そうにも口を塞がれてしまい、  
そのまま森の奥へと運ばれる……





「やめ、放し……ああっ!!」

服を脱がし、身体を弄ってはくるものの、  
魔物とは思えない程丁寧に扱われていた。

あ、

ゴゴ

クニ

フ

はう

目わけ……!!

少しだけ身の安全を感じたが、

枝の一本が秘部を執拗に弄ってきた。

「あ……っ！そこ、は……!!」





「……は、あぁッ!?何……、を……!?!」

秘部に樹液を塗りこまれる。毒ではないようだが、身体が火照ってくるのを感じた。

は、

そして、柔らかくなった秘部を広げ、さらに肛門にも、枝の一本が侵入してくるのだった。

「あ……あぁっ!やめ……、はッ!?!」

下から、形状が他の枝と違う物が近づいている事に気が付いた。

ズルル…

ヌッ  
フッ

ぬ  
!!!

グッ

ズク  
ズク



「あ……、かはッ!?……いや、

あ……抜いて……下さッ!?」

容赦なく先程の枝に秘部を貫かれる。

あ  
あ

やはり、ただ生かされている訳ではないのだとは思っていたが、  
この行動に何の意味があるのか、この時はただ  
破瓜の痛み押し流され、考える余裕はなかった。



そして、挿入された物が膨らんでいるの感じた。「……な、何?!……ガツ!?!」

下半身に力を入れて抵抗するも、分泌される樹液で、身体の奥へ奥へと何かが運ばれていく。

「あ……、あつ……嫌……あ!」

あ

あ

ひゅ

ズン

ズン

ちゅっちゅ

ちゅ  
ちゅ





大量の樹液とともに、それは腔内に放り出される。

「あ……は、あ!?……ああッ!」

あ  
あ  
あ  
あ  
あ

「何……、を!……丸くて……、堅い……?」

まるで種のような、しかし種だとしたらなんの為に?

理解できない魔物の行動に恐怖し、ただ救助を待つばかりだった。



「ふ……あつ……あ……」

引き抜かれた事で少し安堵し、  
漏らしてしまう。

ひゅん

あ……

は

は

ひゅん

ハ  
ハ  
ハ

下  
下

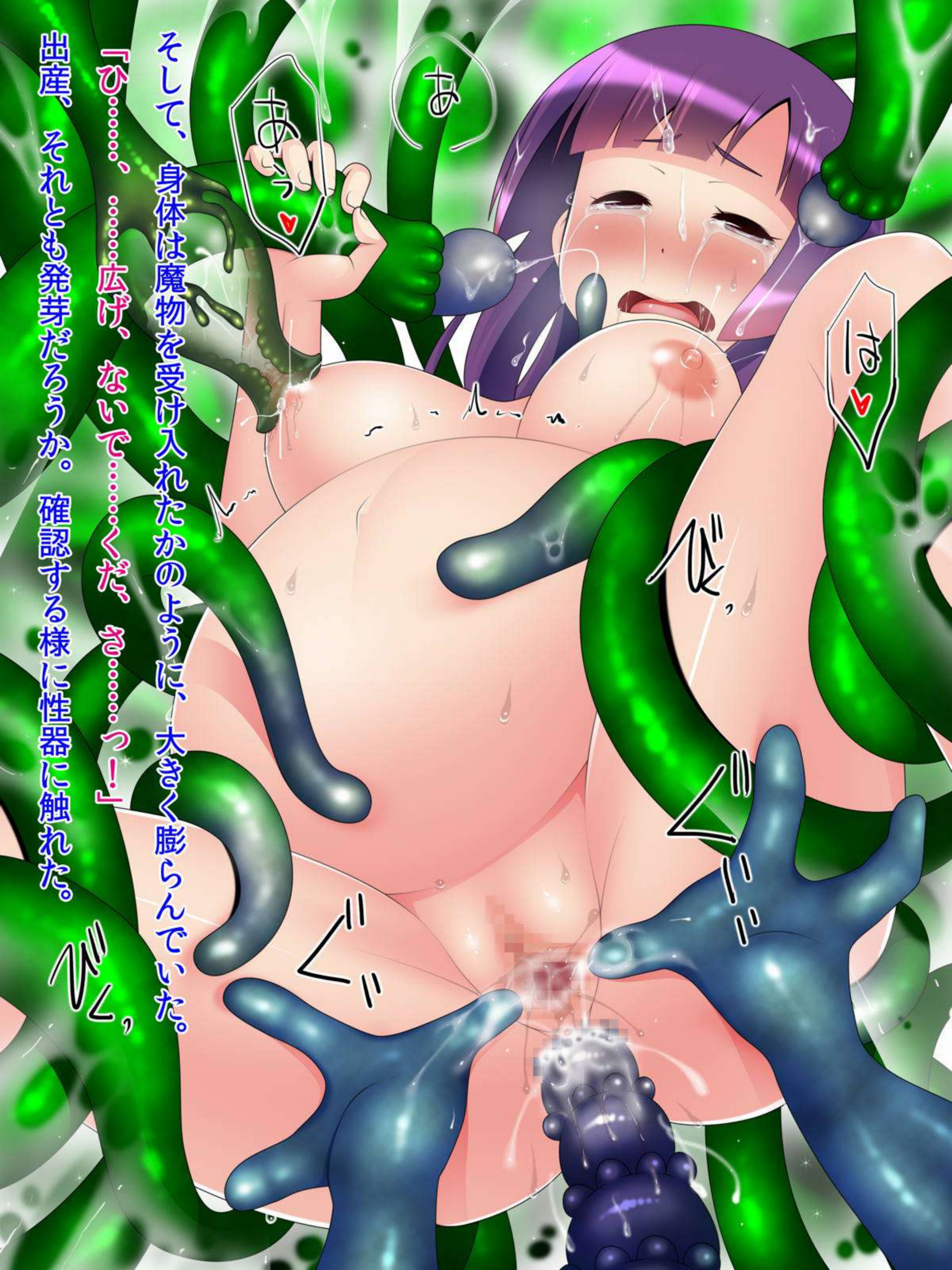
そういえば用を足すのが目的だったと思い出した。











あ

あ

あ

そして、身体は魔物を受け入れたかのように、大きく膨らんでいた。

「ひ……、……広げ、ないで……くださ……っ！」

出産、それとも発芽だろうか。確認する様に性器に触れた。

ん、

ん、

ん、

ん、





「だ……め、です………！こんな事………！………！」

変貌したお腹と噴き出す母乳から、ある程度覚悟はしていた。  
しかし実際、身体の中から這い出てくる何かを目の当たりにし、絶望する。

ちゅる

ぢゅ

ぢゅ

ズ  
ズ  
ズ

あめ

あめ

あめ

ぢゅ

ズ





「……あつ……いや……いや……いやあつ……!?」

なかなか出て来ないせいか、産みだされた物を掴んで、抽送する。その行為に刺激され、何度も達してしまふ。そして――

だめ

だめ

だめ

だめ

だめ

だめ

だめ

だめ

だめ

だめ

だめ

だめ

だめ

だめ

だめ

だめ

だめ

だめ

だめ

だめ

だめ

だめ

だめ

だめ

だめ





完全に産み落とし、脱力した。

「はっ……!!……あ、あぁッ……!!?」

自分が魔物を産み出す為に捕まえられたのだと、思い知る。

ん、

ん、

はっ

は

は

ん

ん

ん



は、

は

ぞく

ぞく

あ

く

く

く

...

「あ……、はっ……♡」  
そして、それ以上にこの行為を受け入れ、  
「次」に期待している自分を……、知ったのだった。

おわり



「は……っ……ん……ッ！」

かつて人であった時の欲望が、  
転生を繰り返した事で暴走した。

あ、っ

ん、

ん

は、っ

びく

びく

びく

びく

びく

振り返りにした冒険者を混乱させると、  
意のままに操る事が出来た。





しかし自身の大きすぎる一物は、  
頑丈な冒険者であつても  
受け容れられる物ではなかつた。

は、♡

ちゅる

ちゅ♡

は♡

あ♡

くろ

ん

ん

そこで、フレイムキューブによる  
膣穴の拡張を思いついた。

74



しかしフレイムキューブはというと  
勝手にわからず、穴という穴を

攻め立てる。

「あ、あああッ!？」

「な、に……っ!？」

突然の痛みに混乱が解けてしまう。

が、暴れる様子もなかったの

と、りあえずそのまま攻めさせた。

ちゅ

ちゅ

ちゅ

あ

ちゅ

ちゅ

あ

あ

ちゅ

ちゅ





「や……あーや、めッ!!」

「あ、……うあッ!!」

慣れてきたのか、キニューブ達が  
激しく抽送する。

はあ、

あ、

ズッ

ズッ

ズッ

ズッ

びん

あ、

ズッ

ぬ  
ちゅ

しかし、正気に戻ったせいで  
奉仕が中断されてしまったので、  
混乱の術をかけ直した。

ず、  
ちゅ

ちゅ





「……あ……、んっ！んくー！」  
「ひあ……！は、ああー！」  
悲鳴が嬌声に変わる。

甘い声に気持ちが高ぶり  
射精する。同時にキューブ達も  
精液を放ったようだ。





「は……あ……!!」

「ん……、!じゅる……っ」

大量に溢れた精液を舐めさせる。

んっ

あっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

魔物の精液を喜んで啜る彼女達を眺めながら、  
しばらくはキューブ達の相手をしてもらおうかと思う。



しかし我慢できなくなっ  
てしまい、  
あまり目を待たず挿入を試みる。

あ、  
あ、

「あ……、……はあっ……じ、て……！」

……彼女もこう言っているし  
求められては仕方ない。……混乱中だが。





性器に性器を押し付け、力を入れる。

どう考えてもサイズが合わない。

「……ん……ッ！」

こんな状態でも流石に恐怖があるのか、

顔を引きつらせている。

だがもう我慢の限界であった。





「あ……ぐツ、……くうっ！」

キューブ達の拡張のおかげか  
なんとか亀頭は収まった。

は、う

ズ、  
グ……

しかしこれでは満足できない。

動かすにはもう少し勢いが必要だなと、

少し力を入れる。





「……はッ!?……ああああッ!?」

力を入れすぎたようだ。彼女の身体の中を奥まで押し上げているのが外からでもわかる。

あッ!!

んん

あ

あ

「だいたいよ……ぶ。動、いて……」

その言葉に促され、ピストンを始めた。





「ふ……あり!?……あッ!」

一度引き抜き、再度貫く。繰り返しているうちに、  
身体が馴染むのがわかった。

あ  
あッ

あ  
あッ

「……は、あッ!……あ、あッ!」

ぐく

アッ

ッ

ス  
ル  
ン





「……お、……おあつ!?!」

一番奥まで挿入し、射精。

は、あ、あ、あ

あ、あ、あ

彼女の腹部が大きく膨らんだ。  
そして、精液の量に耐え切れず噴射する。









「あつ……、あはッ……!!」

子を孕んだようだったので、膣は避け  
尻穴を楽しんでいた時、破水が起こった。

あつ

あゝあ

びく

あゝあゝ

びく

元は人とはいえ今は魔物、自身の精子で  
人を孕ませられるとは思っていなかった。





「……でる、あつ……、あぁー！」

しかし……、なんと出てきた子は  
キューブであった。

確かにはじめの頃は相手をさせていたが……。

「あ、あぁあッー！」





「あ………！また、でて……、あはッ」

キューブをひり出しながら、  
彼女は達しているようだった。

は

びく

は

は

は

は

は

は

その様を眺めていると、  
孕ませる事が出来た  
キューブに、自分が嫉妬して  
いるように感じた。  
そして、次は自分が孕ませて  
やると決めたのだった。

おわり



「こんにちは！お届け物です！」

「おう、ご苦労さん！」

「これでも飲んで  
ちよつと休んでいきな」

「あーありがとうございますー！」

「お願いしたクエストの  
報酬品になります」

「……あれ？」

「なんだか……」

「眠く……」



「あ、れ……？私……、何を……？」

(うまく効いてるか……？)

「俺と遊んでたんだろ？」

「……ああ……、それで……したっ!？」

あ、の……っ!何で……舐め……？」

ぴくん

はっ

はめ

しゅ

「お医者さんごっつこしたいといっただのは

お前さんだろ？」

「う……？あ……っ!はい……」

(何でも受け入れるな……、これなら)





「は、あ……ッ!?そ……こ、は……」

「熱くなってるだろ?よく調べないとな」

「あ……、う、ん……っ!」

は、……

あ

(催淫香もよく効いてるようだな、  
高かったただけあるぜ)





「どれ、よく見せてみな」

「……あ、そんな……っ！」

「そこは……！」

あ……♡

あ

は

は

「大丈夫大丈夫、これも遊びの一部だぞ」

「……そう、あそび……」





「は……、あ……!?何……が」

「ちよつと刺激が強いかな？」

悪いところを舐めて治療してるだけさ」

あ、

あ、

あ、あ、

あ、

「は……、あ……、あ……、あ……」





「あ、そこ……！なんだか、熱くて……」

「よしよし、念入りに調べてみよう」

はー

のの

「……は、あ……、もう少し、奥の方が……」

（だいぶ抵抗がなくなってきたな……よしよし）

くちゅ

くちゅ





「ふあ……あ、あ……」

(流石に、狭いな……!)

あ、あ

あ、あ

ぬい、い、い……

「あ……、は……、そ……」

「おう……、まかせとけ」





「は……あッ、あッ……！」

（おっと、これ以上は膜が裂けちゃうか）

あ  
あ  
あ  
あ

あ

あ  
あ  
あ

「なに……か……！くるー！あ……はっ!?」

（いきそうなのかな？なら、このあたりを……）

く  
ちゅ

く  
ちゅ

く  
ちゅ





「……あ、はああッ!!」

だめ……、あつー!漏れちゃ……ああッー!」

「おつと……」

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ

「よし……、汚れちゃったし下着は脱ごうな」

「あぁ……、ごめん……なさい!止まらな……いっ!?!」









「ようし、そんじや……」

ちよつと痛いかもしれんぞー!

「えっ……?」

あ、あ

あ、あ

あ、あ

あ、あ





「……はっ!? あ、ああ!!」

「どうだ……、痛いか?」

「はい、すこ……し!」

(指でギリギリだったのに、  
出来るもんだな)

「はっ、はっ」

「あ、あ」

「あ、あ」









「……あ、は……っ！」

「抜いちゃうんですか……?」

（うーむ、これ香が

効き過ぎじゃねえのか……?）

は

は

は  
は  
は

は

は





「あ、……の！身体が……、あつくて

変……なんで、す……！」

「ああ、今治してやるよ。浣腸で」

「かん、ちよう……ですか？」

は、

は、

「嫌か？」

「は……は……く……く……」





「……ッ！ひ……、あああッ……！」

「太い……、ですッ！」

「まだ、先っちよしか、はいつてないぞ！」

すち

カッ

カッ

ッ

あめ

あめ

「マッかよ……。なら、もうと興奮せいで！」

「は……。ああッ……。苦し……。けど、気持ちいい……。です！」





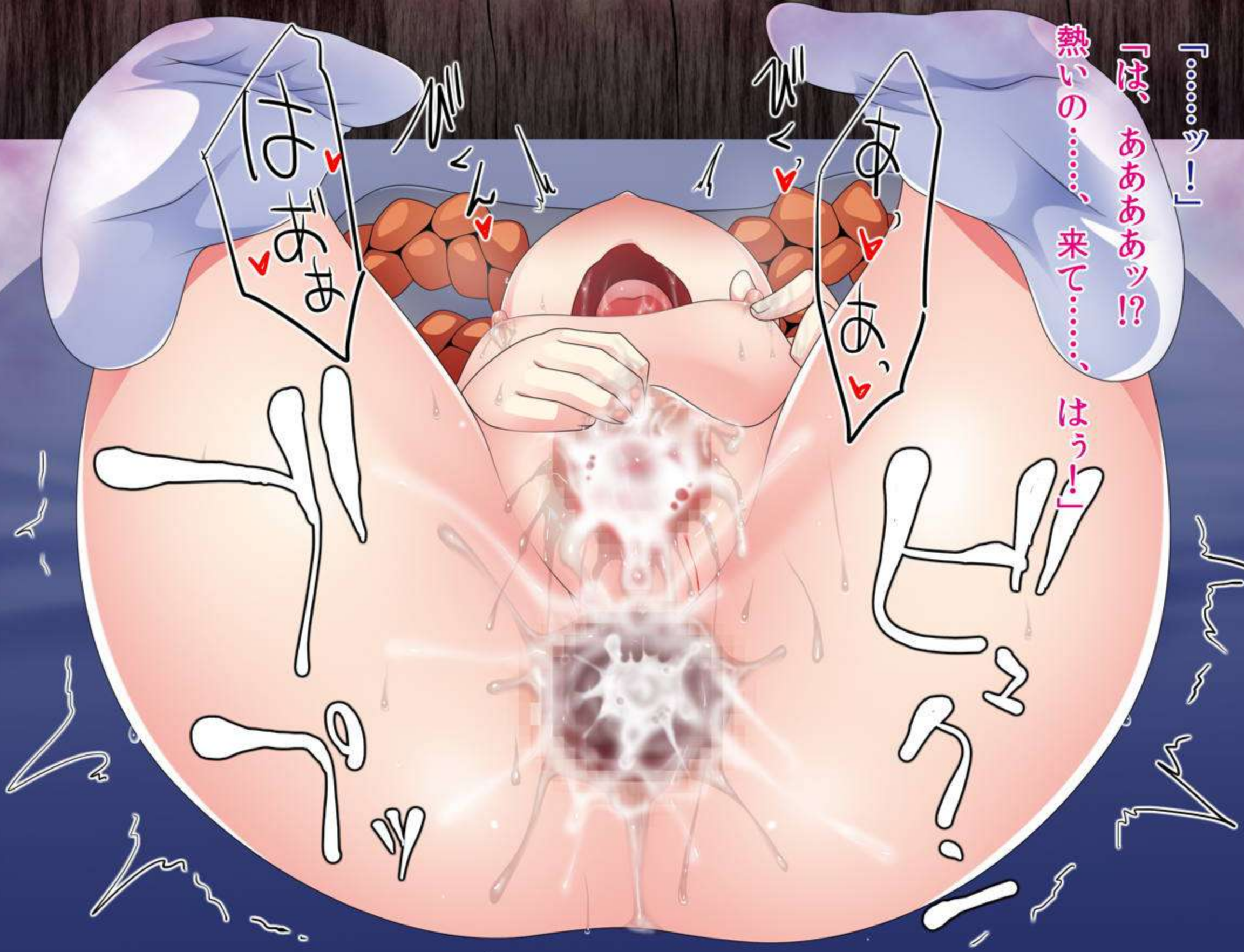


「……ッ！」

「は、あああッ!？」

熱いの……、来て……、

はう!」





「あ……はっ！もっど……、あ！」

(……そろそろ切り上げねえとバレちまうか)

「いいか、今日の事は誰にも言うなよ」

「え……あ……は、い……」

「そんじゃ、そろそろ寝る時間だよな？」

「あ……、そう、……です……ね」

あ  
ん  
ん  
ん

ん  
ん

ん  
ん  
ん

あ  
ん  
ん

あ  
ん  
ん



「おーい、そろそろ起きないと心配かけるぞ」

「……ふんふん?」

ムム...

「あ、ごめんなさい! 私、いつの間にか」



がは

「疲れてたんだろ。」

「気にすんな!」

「はい!ありがとうございます。では私はこれで失礼しますね」

「ああ、また『遊びに』来いよ!」

「……あ……えっ?あ……あッ!」



「それじゃ……あ、また遊んで下さい、ね……♡」

は、

は、

は、

ス

ス

ス

ス

じわ…

（なるほど、俺の暗示は

かかったままか。こりや

いい玩具が手に入ったぜ）

おわりの



魔物討伐を終え、

温泉に入ろうと近づいた矢先……

「え、ええっ!?!」

「もう一匹、いた……!」



たっ





「ここは俺達で押さえつつから

とにかくお前等は助けを呼んで来い！」

(あ、)



(あ、)

「と、言われてここまで

来ましたけれども……」



「丸腰じゃ、あぶない……」



「うわっ!?

裸の女の子が迷宮に!?

「え……、あつ!?

これは……、そのつ!」

「仲間が魔物と戦ってる。

手助けして欲しい」

「……何事だ?」





「なるほど、温泉に入っていたら  
魔物に襲われたと」

「は……、はいっ！」

「お見苦しい格好で……」

「ごめんなさい」

「いやいや眼福で……ゴホン」

「助けてくれるなら、

「はやく戻ろう」





「それじゃあ急げ！うー！」

「馬鹿！お前ちよつとは悩めよ！」

「えっ？？」

「迷宮に裸の女の子とか

どう考えても畏だろ！」

「うーん、でもいの子達

街で見かけた事あるし……」

「だったら余計にもつと……」

男としてやる事があるだろうが！」

ひそ

ひそ





「やるこ」どつて……そんな」

「ほら、よく見てみるよ！」

「う、うむ……これはなかなか」

「それにな、冒険者が苦戦する魔物との

戦いの手助けだぞ。おそらく命懸けになる」

「そ、そうだね……」

「だからその前にちよつとだけ……、

おいしい思いをしてもいいと思わないか？」

「なるほど！」

ん

もじ





グイ

カ

は

おめ  
おめ  
おめ

「と、いう訳で怪しい所が無いか  
調べさせてもらおうよ」

「え、ええっ!？」

「そんな……あっ!？」



「人の姿で油断させる  
魔物もいると聞くし……」

あ……

「わ、私は魔物では……あつ!!?  
大丈夫すぐ終わるから」

「味も調べないとね」

「そんな……恥ずかし  
かし……あふつ!!」



「ひあつ!!そこは……!!」

「ん……かたくなってきたね」

ちゅーん

あーん

あーん

あーん

あーん

あーん

あーん

あーん

あーん

あーん

あーん

あーん

あーん



「じゃ、君は俺らが調べるって事で」

「……」

（あれ、いつの間にか  
人が増えてる……？）

さわ

さわ

んー

ん

はっ

「はあっ……はあっ……」

怪しい所は……、

ないかなあ……？」「















「わかり、ました……」

「んじや、再開といくか」

「ひや!?そ、こは……」

きたな……っ!」

くち4

あ……

ぞん

はう

ぞん

「おや?温泉に入って

汚れは落としたのでは?」

「そ……ういう意味では……」

「これはますます怪しいなあ」



「ひ、あ……、あつ！」

「まだ、です……か？」

「うーん、もうちよつと奥まで

入れてみないと……」

フッ

ちゃ、

ちゃ、

ガク

お、

お、

ん、

ガク

「う……くっ!?……あのっ！」

「ん……うしたの?」

「……お……、っトイレに……」

ん





「そんな事言って、

逃げ出す気じゃないの?」

「ちがつ……、あ!

本当、に……!!」



「あ、ちの子みたい」  
「いざしちやいなよ」

「そ……んな……、事つ……!!」

「ちゃんと人間と同じかどうか

見ててあげるから、さー!」





あ、あ、あ

あ、あ、あ

あ、あ、あ

くちゅ

「ほら、これで

しやすくなっただらろ？」

「やめ……、あ！」

人前で、こんな……!!!」





「またココを刺激すれば  
出てくるかな？」

「あ……く……！ やめ……！！」

＄

＄

＄

＄

＄

＄

＄

＄

＄



「は……ああっ!?!  
ダ、メ……えっ!」





「う……あっ……………」

これで……信じて

いただけますか………」

（しまった………そういえば

認めたら、魔物退治を

手伝う事に……）」

はー

あ、

はー

「う、うーんもうちよつとよく

奥まで調べないと分からないな」

「そんな……、まだ……？」

（ここまでしておいてなんだが、

やっぱり命は惜しい！

無茶振りしてやりすぎですか）







「わかった。これで、いいの……?」

「え、えええっ!」

(まさか本当にやるなんて……)

「やるなら、はやく」

「そうですね……私も覚悟を決めました!」



あ、あ

「どうぞ……、う……っ」

「ご覧になってください……」

（彼女達がこんなに必死に

なっているのに俺達ときたら……）」

「わかった、君達を信じるよ」

「ほ、本当ですか！」





は

あ

あ

「ただ一つ、問題があつて……」

「なんででしょう……きやつ!?!」

「いやあ……、こんな状態じゃ

戦おうにもちよつとね?」

「抜いてもらえないかなー、なんて……」

「……いいよ」

「やっぱりだめだよね……って、いいの!?!」

「ヒキ」

「ヒキ」





「それじゃ……さっそく」

あめあめあめ

「君はどうする？  
なんなら俺もあつちの子に  
お願いするけど……？」

「あ……あめ」

あめ

あめ  
あめ

あめ  
あめ

あめ  
あめ

あめ

あめ  
あめ

あめ  
あめ







ちびちび



ちびちび

ちびちび



ちびちび

「いえ……私も、やりませ……！」

「そう？それじゃ……」



「あ……ん……んあー！」

「んあ……んあ……んあなら」

「あ……ん……んあー！」

あ

あ

あ

あ

「よ……ん……んあー！」

「俺も混ぜろよな」

あ

あ







「なんだ、いい所  
だったのに……!」

「急いでるんだろ？」

「使える所は使った方が  
いいよな？」

「ん……!う……ん!」

ひく、

ん

ん

ひく、

ちゅ

ん



「あ……っ！はあ……！」

「流石に、キツいな。」

「食い千切られそうだ」

「だったら、大人しく

順番待ってるよ！」

「そう言うなって……。」

もう、少し……！」







「は……」

「あ……」

「は…… ああ……」

「は……」

「は……」

「は……」

「は……」

「は……」

「は……」



「ほら！自分で動かないと」

勃起は静まらないよ！」

「ん……、くっ……！」

乳  
4<sub>2</sub>

メ

メ  
メ

メ

メ

メ

メ

メ





「は……っ、うう……!!」

どう、ですか……?」

「そうそう、自分の

気持ちいい所に当ててみな」

「そん、な……、はしたない、

こと……、んっ!」





「お、乗ってきたみたいだな。

んじや……」

「あ……ッ!？」

そっちは……」

「嫌なら、あっちの子に

やらせてもらおうかな?」

「また、そんな……」

ずるいです……」

んしん

あ、あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ





「壊れないように、ちやんと

ほぐしてやるからよ」

「ふあ……!!」

舌が……なか、に……っ」

「ほら、どう？っ……ちも

気持ちいいだろ？」

「ちが、あ……っ!」

こんなの……、知りま……あ！」

ちゅるるる

ちゅ

れろっ

しゅん

あ、ん

あ、ん

あ、ん

あ、ん

ん、ん





「ちんぽ入れてやるから  
ちよつとおねだりしてみてよ」

「ち……ん、ぽ……?」

「そうそう、ちんぽで

尻の穴穿ってやるからさ」

「っ……………入れて、

ください……」

「もつと詳しくー!」

「おし、りに……、お、ちんぽ

入れて、下さ……い」





「んーまあ初めてなら  
そんなもんか」

「あ……ああッ……!!？」

「ほら、力抜いて!この、

押し出される感じが……!!」

「んんんっ!!」

ズッ……

あッ

ズッ

ズッ

ズッ

ズッ





「おっ！全部はいつたよ！」

「ひぐ……、あッ……!!!」

「さあ、どつちの穴が、

気持ちいいのかな……?」

「わかり、まっ……せん!

わか、りま……、ああっ!

「勿論尻穴だよ、ね！」

「ふあ!?奥……ま、でっ!」

「おまんこだつて、いいよ、ね!」

「あ、ああっ!?!……どつちも、

どつちもいい、です!!」





「お、精液……でるよ！」

「……!? まって、下さっ……！」

「ごっちも、もうー！」

「ああッ!? だ……めえっ!?」

「う……ごめん! もう遅……」

「ひゃ、ああああッ!」

あっ、あ、ああああッ!!

ぐん

あ

あ、あ

あ





はっ、はっ

んん

はっ、はっ

はっ

「いやあ有難う。すっきりましたよ」

「……はっ、これ、で……?」

(これだけやれば、

……もう悔いはないな)

「あ、ちんこ汚れちゃったから

綺麗にしてくんない?」

「お、おい!」

「……」

んん

はっ

はっ





「え、と……、綺麗に、でしょうか？」

「そう。ロでー！」

「……っ!?!」

「……くちで、やればいい?」

「え、ええええっ!?!」







「あ、あの……、また、硬く……んもっ!?!」



「あ……、はい」「お、俺も!」

「じゃ、じゃ俺も……」



「全部なめとってね」



「う、おっ……?吸い付くね……!」



「つくう、尿道に残ったのまで吸い尽くされそうだ!」



「いやー、また起っちゃったなー。  
仕方ないから、もう一回らいいよね？」

「……っ、……は、……」



「じゃ、じゃあ俺も……」

「はい、……どうぞ、お使い下さい♡」



ちゅ  
ちゅ

ん

あ、

ん、



「へえ、珍しい職業だとは思っただけど  
本当にお姫様なんだ。」

「ん……っ、あ、そうです……っー!」

「俺達の精力が尽きないのも、  
君のスキルのおかげかもよ?」

「なる……、ほどっ! そうかも、

知れませんが、……ね。

でしたら、尚更がんばらないと♡」







は、

お、

「腰使いも、

上手くなつた、よー!」

「あ……、は……っーはやく

出して、下さいなね……!」

ゴクッ

「あ、ああ!もう、出るよ!

中で、いいよな!」

「は、い……っーズィンだぞ、

構いませんッ!」

ム  
ッ  
ッ

ム

ム

ム

ム







「……あっ！……あぁ！」

「いつまでやってんだよお前」

「いや、すっげー具合よくなー！」

あゝ、あゝ、あゝ

あゝ、あゝ

あゝ、あゝ

あゝ、あゝ

あゝ、あゝ

あゝ、あゝ

あゝ、あゝ

「精液でお腹ちよつと  
ふくらんでんじゃん？」



「俺はやっぱりこっちの方が好きだなー」

「あ……、はっ……!」

あ……

んー

んく

くちゅ

ぬい

んく

「なんだよ、

混じりたかったのかよ」

「空いてるんだから

いーじゃん?」

く……













「うわー」

「おっ、おっ、おっ」

「ふう……、うわ、何お前  
まだ射精してんの？えつぐ  
「いやあ、相性よくってさー。  
……このままいけるよね？」  
「……っ、あ……う」  
「俺のチンポの形、直腸で  
覚えような！」  
「……ほどほどいな」

「あ、あ、あ」

「あ、あ、あ」

「あ、あ、あ」

「あ、あ、あ」



そして……

「流石にもう起きたないわ……」

「そろそろ行かないと、

この子達の仲間がまずいんじゃない？」

「そういえば……、

すっかり忘れてた……」

「……結構経っちゃったし

もう間に合わないのでは？」

「あーそうだなあ……、

惜しい冒険者を亡くした……」

「まだわからねえよ!?

っていうかそれが狙いか!」

「やるだけやって……、

ひどすぎる」

「い、いや……お前らだって

のつてたじゃん!」

「それは……、うん」

「まあ、二人が目を覚ましたら

覚悟を決めよう……」

「そうだね……」

は、

は、

ムム

……

あ……

あ……

ムク

……



「……お前ら、なんて格好してんだ」  
「……ベルが行けって、言ったんじゃん」  
「そ、そうだったけ？」  
「みなさん、ご無事だったのですね！」

「あ、ああ。長期戦になったが  
なんとかかなー」

「よかった……、いろんな意味で」

は、

は、

「あ……、衛士の皆さんも、本当に……  
ありがとうございます、ございました」

「それでは、我々はこれで。  
またお会いしましょう……」





「いやー、無事で

よかったよかった」

「んっ……!?あ、ありがとう

うございました……っ」

「ッ……、ベルの前で、

こんな……っ!?」

「俺さ、君のココが

忘れられそうにないんだよね。

また相手してくれるなら、

さつきまでの事は

誰にも言わないよ?」

「……わか、った……から、

今は……ッ、あ!」

「あ、いいねそれ。姫様はどう?」

「出来れば……、あっ!

皆さんに……心配は、

かけたくない、ので……っ」

「んじゃ、交渉成立って事で

「う、く……っ!」

「次はもつと色んな事を

教えてあげるよ!」

「……は、い……ッ!」









































































































































































































































